

博士論文（要約）

論文題目 『南北朝間を移動する人々と北朝貴族社会』

氏名 堀内 淳一

(2) 目次

目次

序章	王朝の分裂と南北朝間の人の移動
第一章	南北朝間の使節よりみた「文化」の多様性
第二章	馬と柑橘 —— 南北朝間の外交使節と経済交流 ——
第三章	使者の帰国後
第三章	付表
第四章	府佐属僚からみた北魏の亡命氏族
第四章	付表
第五章	司馬氏の帰郷
第五章	付表
第六章	北魏宗室の亡命と帰還
第六章	付表
補論	『陳書』の編纂過程と隋陳関係記事
補論	付表
終章	
参考文献	

(3)本文

博士論文の全部が、すでに出版されていて全文公表できない。

堀内淳一『北朝社会における南朝文化の受容 外交使節と亡命者の影響』（東方書店、二〇一八年三月）ISBN:978-4-497-21809-4

(4) 参考文献

- 桑原隲藏「歴史上より観たる南北支那」『東洋文明史論』平凡社、一九八八（初出『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』岩波書店、一九二五）
- 志田不動磨「北魏末における支那國內市場の成立過程」『歴史教育』六一七、一九三二）
- 岡崎文夫『魏晉南北朝通史』（弘文堂書店、一九三二）
- 室町榮夫「南北朝支那に於ける外使節の素質」『歴史学研究』一一四、一九三四）
- 綾穆「中国史上之南北強弱観」『古史地理論集』三聯書店、二〇〇四（初出『禹貢』半月刊三三四、一九三五）
- 内田吟風「魏書の成立に就いて」『東洋史研究』二一六、一九三七）
- 顧頡剛、史念海『中国疆域沿革史』（商務印書館、二〇〇四）（初版：商務印書館、一九三八）
- 仁井田陞「六朝および唐初に於ける身分的内婚制」『支那身分法史』座右寶刊行會、一九四二（第五章）
- 武仙卿（宇都宮清吉・増村宏訳）「商業交通と工業」『魏晉南北朝經濟史』生活社、一九四二（第四章）
- 陳寅恪『隋唐制度淵源略論稿』（三聯書店、二〇〇二）（初版：商務印書館、一九四六）
- 守屋美都雄『中国古代の家族と国家』（東洋史研究会、一九六八）
- 第四章「南人と北人」（初出「南人と北人」（東亜叢書第六輯、一九四八））
- 守屋美都雄『六朝門閥の一研究』（日本出版協同、一九五二）
- 佐久間吉也「北魏の客禮について」（東京教育大学東洋史研究室編『東洋史学論集』清水書院、一九五三 所収）
- 宮川尚志『六朝史研究 政治・社会編』（日本學術振興會、一九五六）
- 第二章「禪讓による王朝革命の研究」（初出「禪讓による王朝革命の特質」『東方學』一一、一九五五）
- 第六章「北朝における貴族制度」（初出「北魏における貴族制度（上・下）」『東洋史研究』八―四五・四六、一九四三・一九四四）
- 第八章「六朝時代の都市」（初出「三―七世紀における中国の都市」『史林』三六一―、一九五三）
- 宮崎市定『九品官人法の研究』（同朋舎、一九五六）
- 矢野主税「北朝に於ける民望の意義について」（『長崎大学社会科学論叢』六、一九五六）
- 山崎宏「隋朝官僚の性格」（『東京教育大学文学部紀要 史学研究』六、一九五六）

- 竹田龍児 「門閥としての弘農楊氏についての一考察」 『史学』三二―四、一九五八)
- 矢野主税 「鄭氏研究」 『長崎大学社会科学論叢』八一―〇、一九五八)
- 池田温 「唐代の郡望表(上・下)」 『東洋学報』四二―三、四、一九五九)
- 梁容若 「南北朝的文化交流」 『東海学報』四―一、一九六〇)
- 矢野主税 「韋氏研究」 『長崎大学社会科学論叢』一一―二、一九六二)
- 嚴耕望 『中国地方行政制度史』(上海古籍出版社、二〇〇七)(初版:中央研究院歷史語言研究所、一九六三)
- 矢野主税 「裴氏研究」 『長崎大学社会科学論叢』一四、一九六五)
- 藤間生大 『東アジア世界の形成』(春秋社、一九六六)
- 安田二郎 「晋安王子勳の叛亂」 について 『東洋史研究』二五―四、一九六七)
- 谷川道雄 『隋唐帝国形成史論』(筑摩書房、一九七一)
- 序説 「隋唐帝国の本源について」
- 第二篇第二章 「北魏官界における門閥主義と賢才主義」(初出「北魏官界における門閥主義と賢才主義」 『名古屋大学文学部十周年記念論集』一九五九)
- 第二編第三章 「北魏末の内乱と城民」(初出「北魏末の内乱と城民」 『史林』四一―三・五、一九五八)
- 第三篇第三章 「五胡十六国・北周における天王の称号」(初出「五胡十六国及び北周の諸君主における天王の称号について」 『名古屋大学文学部研究論集』四一、一九六六)
- 第三篇第四章 「周末・隋初の政界と新旧貴族」(初出「周隋革命と門閥官僚」 『古代文化』一八―五、「高潁と隋の政界」 『田村博士頌寿東洋史論叢』一九六八)
- 山西省大同市博物館・山西省文物工作委员会 「山西省石家寨北魏司馬金龍墓」 『文物』一九七二―三)
- 勝村哲也 「六朝末の三国」 『藤原弘道先生古稀記念史学仏教学論集』藤原弘道先生古稀記念会、一九七三)
- 鈴木義雄 「隋朝、官僚としての薛道衡について」 『国学院雑誌』七四―三、一九七三)
- 吉川忠夫 『侯景の乱始末記』(中央公論社、一九七四)
- 氣賀澤保規 「隋代郷里制に関する一考察」 『史林』五八―四、一九七五)

- 藤田純子「唐代の史学——前代史修撰と国史編纂の間」『史窓』三三、一九七五)
- 鬼頭清明『日本古代国家の形成と東アジア』(校倉書房、一九七六)
- 矢野主税『門閥社会成立史』(国書刊行会、一九七六)
- 宇都宮清吉『中国古代中世史研究』(創文社、一九七七)
- 坂元義種『古代東アジアの日本と朝鮮』(吉川弘文館、一九七八)
- 第一章「古代東アジアの国際関係」(初出『ヒストリア』四九・五〇、一九六七―六八)
- 第五章「五世紀の日本と朝鮮の国際的環境」(初出『京都府立大学学術報告・人文』二一、一九六九)
- 附編六「倭国王の国際的地位」(初出：竹内理三編『古代の日本』第一卷、角川書店、一九七一)
- 藤善真澄「北齊系官僚の一動向」『道宣伝の研究』京都大学学術出版社、二〇〇二所収、初出『鷹陵史学』四、一九七八)
- 菊池英男「総説」『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七九所収)
- 谷川道雄「東アジア世界形成期の史的構造」『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、一九七九所収)
- 郑绍宗「北魏司马兴龙墓志铭跋」『文物』一九七九―九〇)
- 川勝義雄『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二
- 第二章第五章「門生故吏關係」(初出「魏晋南朝の門生故吏」『東方学報』京都二八、一九五八)
- 第三章「貨幣經濟の進展と侯景の乱」(初出「侯景の乱と南朝の貨幣經濟」『東方学報』京都三一、一九六二)
- 唐長儒「北魏的青齊土民」『魏晋南北朝史論拾遺』中華書局、一九八二所収)
- 西嶋定生『中国古代国家と東アジア』(東京大学出版会、一九八三)
- 尚振明「河南省孟县出土北魏司馬悦墓志」『考古』一九八三―三、一九八三)
- 吉川忠夫『六朝精神史研究』(同朋舎、一九八四)
- 石井仁「南朝における随府府佐」『集刊東洋学』五三、一九八五)
- 田村實造『中国史上の民族移動期』(創文社、一九八五)
- 西嶋定生『日本歴史の国際環境』(東京大学出版会、一九八五)
- 石井仁「梁の元帝集團と荊州政權」『集刊東洋学』五六、一九八六)

森三樹三郎『六朝士大夫の精神』（同朋舎、一九八六）

第一章「六朝士大夫の性格とその歴史的環境」（初出「六朝士大夫の精神」『大阪大学文学部紀要』三、一九五二）
第二章「玄儒文史」

榎本あゆち「姚察・姚思廉の「梁書」編纂について」『名古屋大学東洋史研究室研究報告』一二、一九八七）

長部悦弘「北朝隋唐時代における胡族の通婚関係」『史林』七三―四、一九九〇）

後藤勝「聘使交換より見た南北朝関係」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』二〇・二一、一九九〇・一九九一）

谷川道雄「六朝時代の名望家支配について」『龍谷大学論集』四三六、一九九〇）

朴漢濟 尹素英 訳「北魏洛陽社会と胡漢体制」『お茶の水史学』三四、一九九〇）

梁満倉「南北朝通使芻議」『北朝研究』三、一九九〇、『漢唐間政治与文化探索』（貴陽人民出版社、二〇〇〇）収録）

榎本あゆち「帰降北人と南朝社会」『名古屋大学東洋史研究室研究報告』一六、一九九一）

王大良「从北魏刁遵墓志看南北朝世族婚姻」『北朝研究』一九九二―二）

浅見直一郎「中国の正史編纂―唐朝初期の編纂事業を中心に」『京都橘女子大学研究紀要』一九、一九九二）

堀敏一「中国と古代東アジア世界」（岩波書店、一九九三）

劉精誠「魏孝文帝時期的南北関係」『北朝研究』一二、一九九三）

馬小青「司馬興龍、司馬遵業墓志銘考」『文物春秋』一九九三―三）

越智重明「華夷思想の形成と展開」（久留米大学比較文化研究科『比較文化年報』三、一九九四）

張承宗「魏晋南北朝時期的南北交往」『中国史研究』一九九四―三）

川合安「沈約『宋書』の華夷意識」『東北大学東洋史論集』六、一九九五）

王友敏「南北朝交聘礼儀考」『中国史研究』一九九六―三）

鈴木真「礼制改革にみる北魏孝文帝の統治理念」『社会文化史学』三七、一九九七）

谷川道雄「総説」『魏晋南北朝時代の基本問題』（汲古書院、一九九七）

葛劍雄『中国移民史』（一、二）（福州人民出版社、一九九七）

岩本篤志「北齊政權の成立と「南士」徐之才」『東洋学報』八〇―一、一九九八）

川本芳昭『魏晋南北朝時代の民族問題』（汲古書院、一九九八）

第一篇第一章「五胡十六国・北朝時代における華夷観の変遷」（初出「五胡十六国・北朝期における胡漢融合と華夷観」（『佐賀大学

教養部研究紀要』一六、一九八四）

第一篇第二章「五胡十六国・北朝時代における「正統」王朝について」（初出「五胡十六国・北朝期における「正統」王朝について」

〔九州大学東洋史論集〕二五、一九九七）

第二篇第四章「北族社会の変質と孝文帝の改革」（初出「北魏高祖の漢化政策についての一考察——北族社会の変質との関係から見

た」（『東洋学報』六二―三・四、一九八一）

第二篇第五章「孝文帝のパーソナリティーと改革」（初出「北魏高祖の漢化政策の理解について」

〔九州大学東洋史論集〕九、一九八一）

第三篇第三章「胡族漢化の実態について」（初出「胡族国家」（『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』汲古書院、一九九七）

第五篇第一章「倭の五王による劉宋遣使の開始とその終焉」（初出『東方学』七六、一九八八）

堀敏一『東アジアの中の古代日本』（研文出版、一九九八）

吉川忠夫「北魏孝文帝借書攷」（『東方学』九六、一九九八）

李成市『古代東アジアの民族と国家』（岩波書店、一九九八）

黎虎「魏晋南北朝鴻臚寺及其外交管理職能」（『中国史研究』一九九八―三）

黎虎『漢唐外交制度史』（蘭州大学出版社、一九九八）

川本芳昭「北朝国家論」（『岩波講座世界歴史』九、岩波書店、一九九九）

中村圭爾「南朝国家論」（『岩波講座世界歴史』九、岩波書店、一九九九）

西嶋定生『倭国の出現』（東京大学出版会、一九九九）

黎虎「鄭義使宋述略」（『魏晋南北朝史論』學苑出版社、一九九九 所収、初出『文史哲』一九九三―三）

黎虎「六朝時期江左政権的馬匹来源」（『魏晋南北朝史論』學苑出版社、一九九九 所収、初出『中国史研究』一九九二―二）

周征松『魏晋隋唐間的河東裴氏』（山西教育出版社、二〇〇〇）

宮澤知之「魏晋南北朝時代の貨幣経済」（『鷹陵史学』二二〇〇）

- 矢島美都子『庚信研究』（明治書院、二〇〇〇）
- 吉川忠夫「島夷と索虜のあいだ」（『東方學報』（京都）七二、二〇〇〇）
- 渡辺信一郎「宮闕と園林——三〇六世紀中国における皇帝権力の空間構成——」（『考古学研究』、二〇〇〇）
- 金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、二〇〇一）
- 川本芳昭「顔之推のパーソナリティと華夷意識について」（『史淵』一三八、二〇〇一）
- 劉淑芬「北魏時期的河東蜀薛」（『中国史学』一一、二〇〇一）
- 楊光輝『漢唐封爵制度』（学苑出版社、二〇〇一）
- 川本芳昭「漢唐間における「新」中華意識の形成」（『九州大学東洋史論集』三〇、二〇〇二）
- 章義和『地域集団与南朝政治』（河東師範大学出版社、二〇〇二）
- 石曉軍「隋唐時代の四方館について」（『東方学』一〇三、二〇〇二）
- 葛劍雄『中国人口史』（二）（復旦大学出版社、二〇〇二）
- 李文才『南北朝時期益梁政区研究』（商務印書館、二〇〇二）
- 前島佳孝「賀拔勝の経歴と活動」（『東方学』一〇三、二〇〇二）
- 北村一仁「荒人」試論——南北朝前期の国境地帯」（『東洋史苑』六〇・六一、二〇〇三）
- 窪添慶文『魏晋南北朝官僚制研究』（汲古書院、二〇〇三）
- 第一部第四章「北魏における光祿大夫」（初出：池田温編『中国礼法と日本律令制』（東方書店、一九九二）
- 第一部第五章「北魏の州の等級について」（初出：『高知大学教育学部研究報告』第二部四〇、一九八八）
- 第一部第十章「魏晋南北朝における地方官の本籍地任用について」（初出：『史学雑誌』八三一〜二、一九七四）
- 第二部第一章「国家と政治」（初出：谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐時代史の基本問題』（汲古書院、一九九六）
- 第二部第二章「北魏後期の政争と意思決定」（初出：『唐代史研究』二一、一九九九）
- 第二部第三章「北魏の議」（初出：第一回中国史学国際会議研究報告集『中国の歴史世界——統合のシステムと多元的發展』（東京都立大学出版会、二〇〇二）
- 第三部第一章「河陰の変小考」（初出：『榎博士頌寿記念東洋史論叢』（山川出版社、一九八八）

第三部第二章「北魏の宗室」（初出：『中国史学』九、一九九九）

- 張金龍『北魏政治与制度論稿』（甘肅人民出版社、二〇〇三）
- 胡舒云『九品官人法考論』（社会科学文献出版社、二〇〇三）
- 徐宝余『庾信研究』（学林出版社、二〇〇三）
- 柏贵喜『四—六世紀内迁胡人家族制度研究』（民族出版社、二〇〇三）
- 李万生『侯景之乱与北朝政局』（中国社会科学出版社、二〇〇三）
- 王永平『北魏時期南朝流亡人士行迹考述』（『北朝史研究 中国魏晋南北朝史國際學術檢討會論文集』商務印書館、二〇〇四 所収）
- 夏炎『中古世家大族清河崔氏研究』（天津古籍出版社、二〇〇四）
- 川本芳昭『中国を中心としてみた漢唐間における「交流と変容」について』（『東アジアと日本 交流と変容』一、二〇〇四）
- 北村一仁『南北朝期国境地域社会の形成及びその実態』（『東洋史苑』六三、二〇〇四）
- 魏明孔『魏晋南北朝隋唐五代卷 中国手工業經濟通史』（福建人民出版社、二〇〇四）
- 陶新華『北魏孝文帝以後北朝官僚管理制度研究』（巴蜀書社、二〇〇四）
- 張旭華『九品中正制略論稿』（中州古籍出版社、二〇〇四）
- 李文才『試論北周外交的几个問題』（『魏晋南北朝隋唐政治与文化論考』世界知識出版社、二〇〇六 所収、初出『北朝研究』第四輯、二〇〇四）
- 北村一仁『南北朝期「中華」世界における「蛮」地の空間性について』（『東洋史苑』六七、二〇〇五）
- 北村一仁『論南北朝時期的「亡命」』（『魏晋南北朝史資料』二二、二〇〇五）
- 胡阿祥『六朝疆域与政区研究（增訂本）』（學苑出版社、二〇〇五）
- 胡志佳『門閥氏族時代下的司馬氏家族』（文史哲出版社、二〇〇五）
- 蔣福璽『魏晋南北朝社会經濟史』（天津古籍出版社、二〇〇五）
- 朱大渭等『魏晋南北朝社会生活史』（中国社会科学出版社、二〇〇五）
- 李金河『魏晋隋唐婚姻形態研究』（齊魯書社、二〇〇五）
- 崔明德『中国古代和親史』（人民出版社、二〇〇五）

- 吴海涛『淮北的盛衰』（社会科学文献出版社、二〇〇五）
- 陈金鳳『魏晋南北朝中間地帯研究』（天津古籍出版社、二〇〇五）
- 石曉軍「隋唐時代における対外使節の假官と借位」『東洋史研究』六五―一、二〇〇六）
- 夏炎「唐代門閥貴族の婚姻關係」『史滴』二八、二〇〇六）
- 室山留美子「北魏漢人官僚とその埋葬地選択」『東洋学報』八七―四、二〇〇六）
- 宋杰『兩魏周齊戰爭中的河東』（中国社会科学出版社、二〇〇六）
- 遼耀東「北魏与南朝対峙期間的対外關係」『從平城到洛陽——拓跋魏文化轉变的歷程』中華書局、二〇〇六 所収。初出『新亞書院學術年刊』八、一九六六）
- 会田大輔「蕭督の「遣使称藩」に関する一考察」『明治大学文化継承学論集』三、二〇〇七）
- 会田大輔「北齊における蕭莊政權人士」『明日へ飛ぶ』風間書房、二〇〇八 所収）
- 稲住哲朗「周隋政權における北齊系士人再考」『史学会大会報告、二〇〇八）
- 川本芳昭「魏晋南朝の世界秩序と北朝隋唐の世界秩序」『史淵』一四五、二〇〇八）
- 蔡憲宗『中古前期的交聘與南北互動』（稻郷出版社、二〇〇八）
- 蔡幸娟「客死異國和落葉歸根之間的國與家」『成大歷史学報』三五、二〇〇八）
- 会田大輔「北魏後半期の州府府佐」『東洋学報』九一―二、二〇〇九）
- 戸川貴行「東晋南朝における天下觀について：王畿、神州の理解をめぐって」『六朝學術学会報』一〇、二〇〇九）
- 窪添慶文「北魏服属諸族覚書」『立正大学大学院紀要』二六、二〇一〇）
- 松下憲一「北魏崔浩國史事件」『東洋史研究』六九―二、二〇一〇）
- 稲住哲朗「盧思道と「周齊興亡論」について」『九州大学東洋史論集』三九、二〇一一）
- 岡田和一郎「北齊国家論序説―孝文体制と代体制―」『九州大学東洋史論集』三九、二〇一一）
- 榎本あゆち「南齊の柔然遣使 王洪範について―南朝政治史における三齊豪族と帰降北人」『名古屋大学東洋史研究報告』三五、二〇一一）
- 牟発松『漢唐歴史変遷中的社会与国家』（上海人民出版社、二〇一一）
- 二「内藤湖南和陈寅恪的“六朝隋唐論”試析」（初出『史学理論研究』二〇〇二―三）

- 一三 「梁陳之際南人之北遷及其影響」(初出『北朝史研究(中國魏晉南北朝史國際學術討論會討文集)』二〇〇四 所收)
 - 一四 「舊齊士人與周隋政權」(初出『文史』二〇〇三—一)
 - 二〇 「魏晉南北朝的天下三分之局試析」(初出『歷史教學問題』二〇〇五—一)
 - 二一 「王融《上疏請給虜書》考析」(初出『武漢大學學報(哲學社會學報)』一九九五—五)
 - 二二 「南北朝交聘中所見南北文化關係略論」(初出『魏晉南北朝隋唐史資料』一四、一九九六)
 - 二三 「陳朝建立之際的合法性訴求及其運作」(初出『中華文史論叢』八三、二〇〇六)
 - 二五 「漢唐間的中日關係與東亞世界」(初出『史林』二〇〇四—六)
 - 二六 「略論唐代的南朝化傾向」(初出『中國史研究』一九九六—二)
 - 二七 「南、北朝在制度文化上的互相影響略論」(初出『高敏先生八十華誕紀念文集』(綫裝書局、二〇〇六) 所收)
 - 二八 「從南北朝到隋唐」(初出『南京曉莊學院學報』二〇〇七—四)
- 会田大輔 「北周宗室的婚姻動向」(『駿台史學』一四四、二〇一二)
- 藤野月子 『王昭君から文成公主へ』(九州大學出版會、二〇一二)

(5)論文の内容の要旨

論文の内容の要旨

論文題目 南北朝間を移動する人々と北朝貴族社会
氏名 堀内 淳一

南北朝時代というと、華北にある鮮卑の王朝である北魏と、江南の漢人王朝との間で常に戦争状態にあったかのように思われることが多い。しかし実際には、両朝は戦争状態よりも、平和的に併存している期間の方がはるかに長かった。両朝の間には定期的に使節が交換された。また、王朝交代などの際には、相手側の王朝に亡命する人物も後を絶たず、南朝、北朝とも、亡命者を積極的に受け入れ、定住のための支援を行っていた。

南北の分裂は、最終的に北朝から出た隋が、南朝の陳を征服することで政治的統一がなされる。しかしこれは、北朝の制度や文化が優れており、劣っていた南朝の文物制度を滅ぼしたというわけではない。むしろ南北朝時代を通じて、南朝の文化的優位は南北双方の貴族の認めるところであった。その一方で、北朝は南朝を指して「島夷」と呼び、中華思想に基づいて、辺境の蛮夷として扱おうとしていた。「漢魏以来の中華の伝統を継承した文明国」と「文化果てる辺境の蛮夷」という、南朝に対する矛盾する二つの南朝観が、北朝の貴族の中には存在していたのである。

北朝の文化や社会は、五胡十六国時代から隋代にかけて、一貫して同じものであったわけではなく、南朝との接触を通じて、徐々に変化していた。本論文では、北朝貴族が南朝をどのように見ていたかを、南朝と北朝の間の人々の移動が与えた影響を通じて明らかにしようとするものである。

南北朝間の人々の移動は、公的には外交使節の派遣があり、また非公式なものとして、亡命があった。まず、第一章では、南北朝間の使者が選ばれる時に、誰によって、どのような基準で選ばれるかを検討する。南北朝間の外交において問われる知識や技術は、儒学、玄学、文学、仏教などの学問だけでなく、弁舌、角力や射的などの武術、果ては囲碁にま

で広範囲に及んでいた。南北朝はそれぞれ異なる文化的背景を持ち、それぞれ得意とする分野、得意ではない分野があった。文学においては、南朝が北朝を圧倒しており、北朝もそのことを認めていた。そのため、北朝は敢えて文学の分野で南朝とは争わず、弁舌に優れ、所作に威厳のある人物を使者に宛てることで、外交の場で、南朝の文化に対抗し、自国の優位性をアピールしようとした。

続く第二章では、使節に伴って南北朝間を移動するモノについて考察する。南北朝間で交換された外交使節は国家間の贈答品を運ぶ任務を帯びていたが、同時に相手国で私的な交易を行い、利を得る者も多かった。使者の私的な交易では、金銀、玉や典籍、薬や南海の珍しい毛皮など、単価が高く、保存の比較的容易なモノが扱われた。一方で、国家間の贈答では、馬などの動物、柑橘などの果物、酒など保存が困難で、嵩も張るものが交換されていた。国家間の贈答は、贈る側の都合だけでなく、受け取る側からの要請に応じて贈ることもあった。国家間の贈答を通じて、受け取る側の国は自国を中心とした華夷思想を宣揚しようとする意図があった。北朝が受け取った柑橘は、南朝が「島夷」であることを象徴するものであり、南朝が受け取った馬は、その軍事的効用も当然ながら、同時に、北朝が「胡」であることを象徴していた。

第三章では、北朝の使者が帰国後、どのような知識、経験を本国で求められたのかについて、帰国後に就いた官職から検討する。北朝では使者が帰国後、宮殿の造営、禪讓の式次第、征服戦争の参謀など、南朝で得た知識を活用することが求められる例が見られる。しかし、時代毎に分けて見ると、北魏前期では帰国後に南朝との国境地帯の地方官となる事例が多く、南朝で得た経験を、国境地帯の統治に用いることが期待されていたと見ることができる。一方で、東魏北斉では中央官への就官が増える。従来、北魏で漢化政策を行った孝文帝は、南朝への憧憬がつよく、南朝での知識を重要視したとされたが、調査からは、南朝への外交使節を経由した知識は重要視されず、むしろ、東魏北斉時代に入ってから、儀礼面で使者のもたらした知識が重用される事例が増えている。北朝が漢化政策によって、急速な「文明化」を果たしたとするのではなく、より長期的なスパンでの変化を考慮しなければならないのではないか。

南北朝間の外交使節の交換は、四九四年に中断し、五三七年に再開されるまで、約四〇年間の中断期間があった。しかし、その間、南北朝の人の移動は完全に断絶していたわけではない。北朝は継続的に南朝からの亡命者を受け入れてきており、それは外交使節が断絶している期間も同様であった。そこで、第四章以下では北朝における南朝からの亡命者に注目した。

第四章では北魏における南朝からの亡命者の府佐について検討した。魏晋南北朝時代の地方軍府では、府主が属僚を私的な縁故によって採用する事例が多く見られ、それは北朝も例外ではなかった。府主となった亡命者がどのような人物を幕僚として登用したかを検討すると、亡命者の子弟が多く含まれ、逆に胡族および山東漢人貴族がほとんど含まれていないことが明らかになった。同時に、亡命者が出仕した府の府主を調べると、やはり亡

命者または宗室であった。このことから、亡命者が他の亡命者の子弟を幕僚に採用する傾向があったことが示された。これは、北魏の亡命者が一つの政治集団を形成していたことと、その集団が北魏宗室と近い関係にあったことを示していた。また、南朝からの亡命者は居住地の面でも集住しており、相互に扶助しながら南朝の生活風習を維持していた。このような亡命者集団は北魏後期に入ると分裂し、政争に巻き込まれるなどして次第に衰退していく。

第五章では前章の具体的な事例研究として河内郡の名族、司馬氏を取り上げた。司馬氏は西晋、東晋の宗室であり、南朝から北朝へ亡命した氏族の中でも有数の家柄を誇っていた。北魏初期に亡命した司馬氏の待遇は、北魏の華北統一と、孝文帝の改革の二つの時期を区切りとして大きく変わる。東晋の宗室であった司馬氏の持つ名声は、南朝から人を集めるための宣伝塔となり得るため優遇されたが、同時に北魏内部の反乱勢力を統合する象徴にもなり得たため、中央からは遠ざけられていた。そのような司馬氏の名声は、南朝で劉宋政権が安定すると次第に失われ、北魏後期には郷里社会との結びつきを取り戻し、一般的な華北の漢族貴族と差がなくなっていく。それにともない、姻戚関係の面でも華北に以前から残っている漢人貴族社会と通婚を結ぶようになる。やがて、北朝末期には郷里の民を率いて挙兵する典型的な漢人貴族となり、唐代に到る。

第六章では、北魏後期の宗室の南朝への亡命を取り上げ、南北朝の外交が断絶している期間における人の移動がもたらした南朝観の変遷を問題とする。北魏後期には、孝文帝の改革により南朝的な政治制度を維持しようとする皇帝に近い宗室や皇后、亡命者集団などと、改革によって権限を失った宗室疏族や中下級の北族らの対立があり、そのため南朝への亡命が頻発した。宗室の南朝への亡命には、亡命者集団が関わっていた。南朝に逃れた宗室や貴族の一部は、梁によって北帰を許されている。梁は北魏宗室や北朝貴族を帰国させることで、間接的に北朝をコントロールしようとし、平和的、軍事的双方の手段で北魏宗室の帰国を支援した。その反面、梁では、華北を夷狄の地と見なしており、過去に華北に亡命した南朝出身者も含めて「虜」と見なして、自国の文化的優位を誇示していた。亡命した北魏宗室・貴族の一部は南朝文化に接した結果、梁に好意的な態度を取る者が現れるようになり、それが東魏北齊と梁との外交使節回復へ繋がっていった。

補論では、第一章で述べた相手国の呼称に関連して、南北朝最末期の隋と陳の外交記録を取り上げ、南北朝時代の史料の性格を検討した。『陳書』記載の対隋関係記事には欠落があり、しかも、それは作為的に削られた可能性が高かった。そのような作為を行う背景には、隋唐代の編纂過程で、北朝に不都合な外交内容が多く含まれていたためであろうと推測し、唐代に編纂された現行の『陳書』には、大きなバイアスが掛かっている可能性を指摘した。

これまで北朝における南朝からの影響については、王肅・劉昶といった史料上で目立った功績を挙げた個人に焦点を当て、彼らの皇帝との個人的な人間関係や才能に、北朝が南朝から影響を受けた理由を求めてきた。しかし、本論では、南北朝時代を通じた使者や亡

命による人の移動があり、北朝貴族社会のなかで継続的に一定の役割を果たしてきたことを指摘した。

北魏初期から北斉末期までの北朝からみた南朝は、全く異質な「島夷」であった時代から始まり、最終的には互いに相手国を対等な文明国と認め合う関係へ変化していった。その中で、劉昶、王肅の亡命と孝文帝の改革は一つの大きな転換点ではあったが、その個人の行跡や一つの事件によって北朝貴族の南朝観が劇的に変容したわけではなかった。本論文で示したように、南北朝が並立して以来、ほぼ毎年のように交換された外交使節や、ことある事に発生した亡命と帰還によって、南北朝間の距離が徐々に近づいていったと考えるほうが、北朝社会の変化を捉える上で有効であると考えられる。